登戸再発見
―建物と地域から追う登戸研究所―

資料館長　山田　朗

はじめに

〔1〕なぜ生田にあるのに「登戸」研究所なのか？

〔2〕建物から追う登戸研究所の姿

〔3〕周辺地域から追う登戸研究所の姿

〔4〕今でも確認できる登戸研究所の痕跡は？

Ⅰ　なぜ生田にあるのに「登戸」研究所なのか？

1　登戸研究所の所在

〔1〕現在：神奈川県川崎市多摩区東三田

〔2〕1934（昭和 9）年当時：神奈川県橘樹郡**生田村**

生田　→　上菅**生**（村）＋五反**田**（村）　1878 年合併

生田村の北東に隣接：橘樹郡稲田町大字**登戸**

2　小田急線（1927 年 4 月開通）との関連性

〔1〕新宿方面からの通勤最寄り駅

新宿：陸軍科学研究所・陸軍技術本部、のち陸軍兵器行政本部、市ヶ谷：参謀本部

「稲田登戸」（現・向ヶ丘遊園）駅：急行停車駅、新宿方面からの終点

「稲田登戸」から先は郊外電車（各駅停車、1 時間に 2 本程度）に乗り換え

「東生田」（現・生田）駅：1943 年までは研究所までの通勤路整備されず

「稲田登戸」駅は、「新原町田」「相模厚木」「大秦野」「新松田」と並ぶ「大駅」

〔2〕生田にあっても「登戸」研究所（1937-1945）：一種の情報攪乱

陸軍科学研究所登戸実験場（1937）、 陸軍科学研究所登戸出張所（1939）

〔3〕日本高等拓植学校（1932-1937）時代：生田村・稲田登戸を併用

慶應義塾大学（1945-1950）時代：**「登戸仮校舎」**と呼称

Ⅱ　建物から追う登戸研究所の姿

1　登戸研究所の範囲と明治大学以前

〔1〕敷地面積（11 万坪）、境界線不明確な部分も

現在の明大生田キャンパス、川崎市立生田中学校、同東三田小学校、西三田団地を含む

〔2〕現在の明大生田キャンパスの敷地

慶應義塾大学登戸仮校舎：1945.10-1950.3

日吉校舎の医学部・工学部・法学部の予科が移転

北里研究所、武藤繊維、巴川製紙（登戸研究所第三科北方班＝製紙工場跡）が借用

〔3〕現在の川崎市立生田中学校の敷地

登戸研究所第四科第一班工場跡、1947 年に（新制）生田中学校に

2　明治大学に残る生田校舎用地買収資料

〔1〕1950 年に土地 3 万 1218 坪・建物 89 棟・4 貯水池・ガスタンク・送水塔などを一括して購入。

購入予定金額 1450 万円、実際の購入金額 977 万円

〔2〕残存資料から分かること

36 号棟の電灯配線図：当時の部屋割りが判明

配管図：貯水槽から給水塔へ、敷地内への配水状況が判明

地下水の汲み上げ：地下 300 尺からの揚水施設あり

３　キャンパスの移り変わり

各所の写真で紹介

Ⅲ　周辺地域から追う登戸研究所の姿

１　多摩区内に点在する登戸研究所関連施設

A　登戸研究所跡（現・明治大学生田キャンパス）

B　日本電気／住友通信工業 研究所生田分所跡（現・専修大学生田キャンパス）

C　登戸研究所第三科関係者寮跡（現・多摩区枡形 6 丁目 19-20 番地）

D　伴繁雄ら所員が居住した営団住宅跡（現・多摩区東生田 1 丁目 4-5 番地）

E　玉川製紙＝登戸研究所登戸分室跡（現・ダイエー向ヶ丘店周辺）

G　小田急線～南武線引き込み線跡（現・三菱東京 UFJ 銀行登戸支店周辺）

２　日本電気／住友通信工業研究所生田分所（1940-1945 年）

〔1〕現・専修大学生田キャンパス（1948 年～）

〔2〕日本電気／住友通信工業研究所生田分所（1940 年～）

テレビジョン研究から電波兵器（レーダー）研究へ

〔3〕具体的な研究内容

電波警戒機（送信機・受信機を別個に設置、ドップラー効果利用）

→　電波探知機（超短波発射式）

高出力・超短波～極超短波を発する真空管の開発・製造

〔4〕登戸研究所との関係

レーダー研究機関を統合（1943 年 7 月）：多摩陸軍技術研究所の設置

→　企業や大学内に 15 研究室を設置（生田分所もその 1 つ）

３　登戸研究所第三科関係者寮（1943 年）

〔1〕現・多摩区枡形 6 丁目 19-20 番地

〔2〕阪田誠盛（上海の阪田機関長）が畑地を買収して宅地に（1943 年 1 月）

→　第三科長・山本憲蔵ら 8 名の宿舎に

４　登戸研究所所員が居住した営団住宅（1943 年）

〔1〕現・多摩区東生田 1 丁目 4-5 番地

〔2〕伴繁雄ら佐官級所員・尉官級所員～下士官・技手所員の住宅 41 世帯に（1943 年 12 月）

５　玉川製紙＝登戸研究所登戸分室（1944 年）

〔1〕現・ダイエー向ヶ丘店周辺

〔2〕資材置き場に指定（1944 年）、研究所から当番制で見張り要員が派遣された

→　敗戦後も偽造法幣の製紙原料が保管されていた（1947 年に山田紙業に払い下げられる）

６　小田急線～南武線引き込み線（1936 年）

〔1〕現・三菱東京 UFJ 銀行登戸支店周辺

〔2〕登戸研究所の製造品の輸送に引き込み線利用はなし（東生田駅にも引き込み線計画あり）

７　登戸研究所周辺の整備

〔1〕研究所～稲田登戸方面の道路が整備される（1938 年）

〔2〕東生田駅から研究所への通勤路の整備（1943 年）

Ⅳ　今でも確認できる登戸研究所の痕跡は？

１　キャンパスに残る「登戸」の痕跡

〔1〕登戸研究所時代のプール（貯水池）

→　資料館の北隣（当時は深さ２ｍほどあった）

〔2〕偽札運搬トラック用道路

第三科の印刷工場から、現在の中央校舎・図書館の間を抜け、弥心神社付近から西門に繋がる「バイク坂」

〔3〕防火水槽：現在３個が確認できる

〔4〕本館前のロータリー跡・植え込み

２　元勤務員と巡る北方班跡地

〔1〕元第三科勤務員・岸井三治氏（1944 年４月より第三科北方班に配属：当時 14 歳）

〔2〕第三科北方班（現・理工学部Ｄ棟周辺）

薬品庫・貯水池・旧抄紙工場・新抄紙工場（1943 年頃から）・用紙倉庫・資材倉庫

〔3〕旧抄紙工場（試し抄紙）

１階：平釜・ビーター・丸網抄紙機・長網抄紙機

２階：彫金・彫刻室（漉しのため）

〔4〕新抄紙工場

１階：ボロ破砕機・地球釜・ドレナー・長網抄紙機・コーティング・ドライヤー・スーパーカレンダーマシン

中２階：１階ドレナーの上　ビーター４台

２階：１階地球釜の上　原料ボロの選別所

〔5〕給水システムと消火栓

生田浄水場 → 神社手前の防火水槽 → 押上管 → 印刷工場近くの給水塔 → 敷地内へ配水

３　稲田郷土史会の調査：複数の「境界石」

キャンパス外縁に残されていた陸軍境界石

おわりに

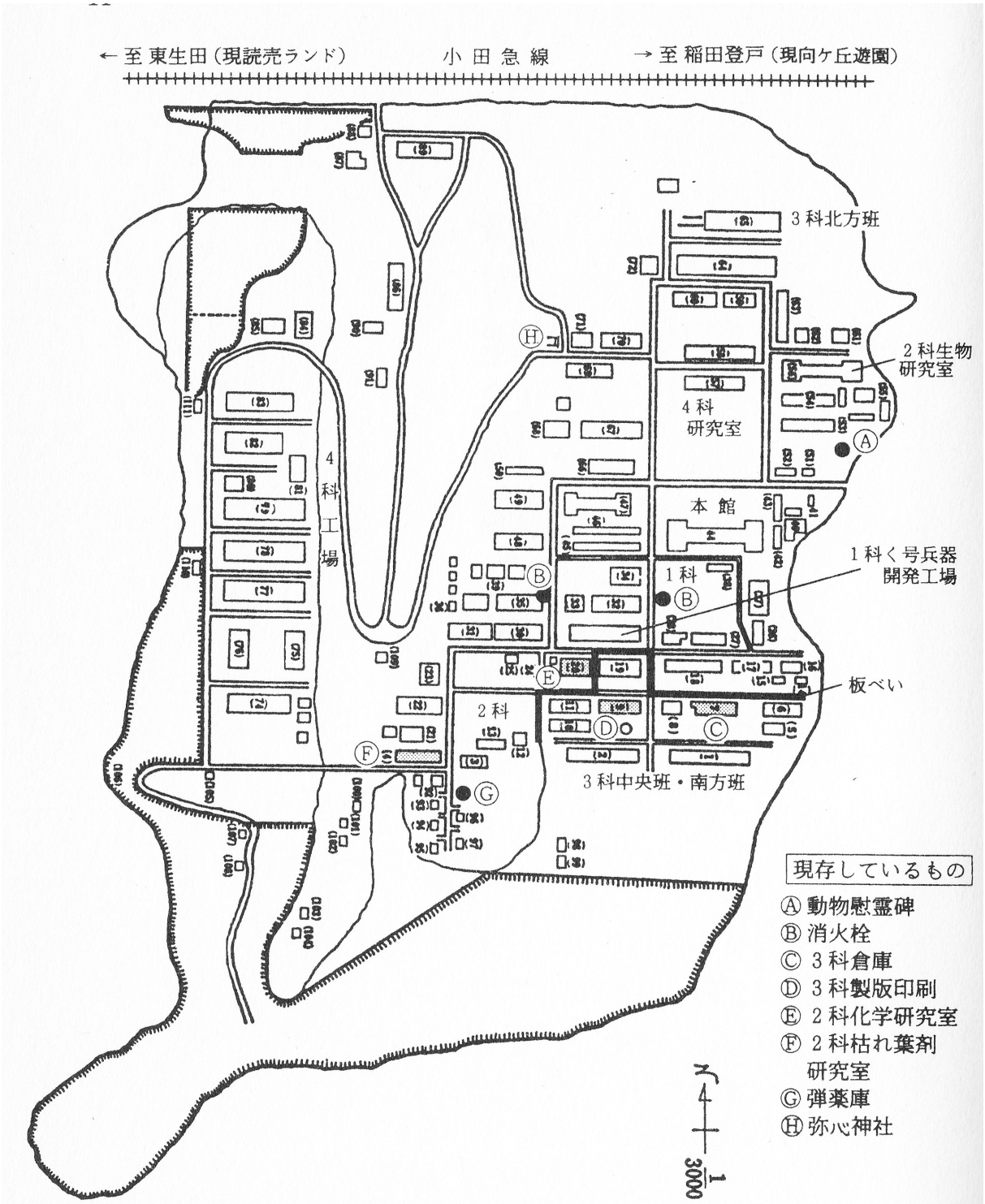
〔1〕キャンパスと地域から戦争を捉えなおす　→　生田・登戸全体の軍事化

〔2〕戦争中の登戸研究所の拡大

【参考文献】

〔1〕伴繁雄『陸軍登戸研究所の真実』（芙蓉書房出版、2001 年、新装版 2010 年）
〔2〕海野福寿ほか編『陸軍登戸研究所―隠蔽された謀略秘密兵器開発―』（青木書店、2003 年）
〔3〕山田朗・渡辺賢二・齋藤一晴『登戸研究所から考える戦争と平和』（芙蓉書房出版、2011 年）
〔4〕渡辺賢二『陸軍登戸研究所と謀略戦』（吉川弘文館、2012 年）
〔5〕山田朗・明治大学平和教育登戸研究所資料館編『陸軍登戸研究所〈秘密戦〉の世界』（明治大学出版会、2012 年）
〔6〕木下健蔵『日本の謀略機関　陸軍登戸研究所』（文芸社、2016 年）

【図１】陸軍登戸研究所の配置図（1944 年）



陸軍登戸研究所の建物配置図（昭和19年）
現在、明治大学生田校舎となっているが、図中に示したように、登戸研究所時代の施設が今も残っている。（原図は『川崎市多摩農業協同組合史』より。渡辺賢二氏作成）

出典：伴繁雄『陸軍登戸研究所の真実』（芙蓉書房出版、2001 年）11 頁。